
無能な三十路ニートだけど異世界来た

ガイアが俺輝けと囁いてる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無能な三十路二一トだけど異世界来た

【Nコード】

N4453X

【作者名】

ガイアが俺輝けと囁いてる

【あらすじ】

三十歳、薄毛の職歴なし引きこもり二一トに幼馴染のエリートが提示した仕事はある世界的ゲームの日本サーバー運営の手伝い。そして迎えた正式オープンで謎の世界に飛んだ俺は『こいつは外れ、捨ててこい』と王様に一目で捨てられた。無能でコミュ障な俺は人権もない生き馬の目を抜く社会で生きていく事が出来るのか。

無能な三十路ニートだけどエリートがお情けの仕事くれた(前書き)

この物語はフィクションですが実在の人物に似たような出来事があつたような気もしないでもない。

無能な三十路ニートだけどエリートがお情けの仕事くれた

ああ、こいつは外れだな、連れて行け

かび臭くて、じめじめした石造りの部屋から引き出された俺は、でかい城の中を引きずり回された拳句、王様にそう宣言されて、『文字通り』そのまま城の外に捨てられた。

石造りの部屋から引きずり出されて、捨てられるまで説明ゼロ。

『ようこそ』とか、『すみませんが…』とかもなし。

言われたのはただ、『こいつは外れ、連れて行け』のみ。

ブラック企業とか圧迫面接とかいうレベルじゃない。

もつと恐ろしい扱いを味わって、自失…ただただ茫然自失…！

白痴…脳みそ真っ白………！

なんじゃこりゃ、何が起こった？

日本語だったから日本だよな？

周りを見渡してみると、明らかに日本より文明レベルの劣った木と漆喰でできた建物ばかりが目だつ城下町で、石畳の地面と合わせる
と日本と言うよりはファンタジーの世界だ。

『なんだ、これドッキリか？』と考えつつ投げ捨てられた塀の外に
座り込んでいると、近くに居た浮浪者がやってきて俺に手を貸して
立たせてくれる。

ありがとうと礼を言いつつ、そのまま立ち上がると、浮浪者は優しく俺の来ていた上着を脱がせ、それを抱えて去って行った。

（ 。 。 ）ポカーン

どうやら、窃盗にあつたらしい。
あまり治安は良くないようだ。

そんな様子を見ていたのか、茶色の前掛けをした女二人がひそひそ話しながら、気の毒な人を見る目で俺を見つつ通り過ぎていく。

高校から学校と家を往復するだけの日々、大学の3年から30まで引きこもりニートを続けてた俺には人と話すのもかなりのストレスだが、この意味不明状態ではそんなことも言ってもらえない。なげなしの勇気と匿名掲示板で鍛えた煽り耐性をフル活用して周りに話しかけることにした。とりあえず道行く中世ヨーロッパ風の婦人に『すみません…』と声を掛けてみたが、目も合わせてくれずに歩き去って行く。

ああ、すいませんキモいですよね。ごめんなさいでした。
自分の格好とえば、三十にして禿げて薄毛の頭に上半身肌着のチノパンですもんね。

よく言われてましたよネットでも。
お前人生オワタwwwテラキモスwwwって。

そのまましばらく待つて話の分かりそうな中年のおじさんに話しかけてみるが、

『今忙しいから、すまんね』

『申し訳ないけど、余裕ないんだ』

等の反応がいいところで、大体はほぼ無視。悪いところではいきなり蹴られた。

何でこんなことになったのか。
そうあれは、俺が久しぶりに家から出たお盆から始まった。

…おい、大宮！お前大宮じゃないか？

お盆の熱い夏の日。

久しぶりに家から出てコンビニに漫画を買いに行った俺に話しかけてきたのは

幼稚園から大学まで一緒だった幼馴染の浅野雄太だった。

『おまえ、心配してたんだぜ。同窓会にも出ないし。』

大学に来なくなつて電話した時には、お母さん部屋から出てこないつて言うし。』

輝くような笑顔で嬉しそうに言うこいつは俺と同じ某地方有名大学を卒業後、某日本を代表する総合商社に勤め、世界を股にバリバリ活躍するビジネスマンだ。

輝くような笑顔で俺のひきこもりについて話しているが、本人はバカにしてるわけじゃない。

こいつは俺を本気で心配しているのだ。

思い起こせば、小学校や中学で俺がイジメられている時は俺がボツチにならないように修学旅行の班に入れてくれたり、引き籠ってる時は大学のノートを貸してくれるなど何とか卒業できるように手を

貸してくれた。俺が引き籠ってからも毎年、唯一年賀状を送ってくるし、海外から帰ってきた時には毎回お土産をもってくる。俺は部屋から出ないので親が受け取るけど。

要するにいい奴なのだ。社会的には。

ただ俺にとつては、自分が惨めになるからあまり関わらないで欲しいのだけでも。

俺は苦笑いし頭を下げるとコンビニ袋を持って家に帰ろうとする。そんな様子に気づいたのか、浅野は『ちょっと、携帯番号教えるよない？じゃあこんど自宅に掛けるわ』などと言って、離れた所で待つ友達の元へ戻って行った。どうやらお盆に帰省して、友達と遊んでいる途中だったらしい。すぐに離してくれたのは人見知りな俺に遠慮してくれたようだ。さすが商社勤務。空気が読める。

そして、俺がそんなことがあったのも忘れた9月。自宅に浅野から電話がかかってきた。

曰く、仕事する気ないか？

話を聞いて要約すると、総合商社として取引してるシンガポールの企業からコンテンツライセンスを購入することになって子会社でゲームの日本サーバーを運営するんだが、運営に参加しないか。給料かなり安いけど。って話だった。

最初は怪し過ぎて、警戒した。

しかし詳しく話を聞くと、何でも彼が初めてリーダーとなって取引してるグループ企業で会社の儲けにはならないもののグループ全体の関係を維持するために恩を売っておきたい。

だから儲けよりも信頼できる知り合いがいいんだよな。それなりに頭良くて。

と内情を隠さず話してくれた。

要するに会社の同期などのライバルの息がかかってない裏切りにくい人材が欲しいらしい。

足の引つ張り合いとは大企業勤めも大変だなとは思ったが、引きこもり職歴なし三十の俺に仕事なんかできるわけないのでもちろん断った。

そしたら、相手は一枚上手だった。

俺が断るのを見越していたのか、親にこういう仕事なら紹介できるんですが…

と前もって根回ししていたのだ。さすが大手商社。優秀だ。

俺が電話で断った途端に親号泣。

あんた折角、浅野君が紹介してくれるのになんてことすんのおまえ、それ断るなら家から出ていけ。

そう言っつて二人とも号泣。

そんなこと言われたらさすがの俺も断れずに働くことに。

そんなこんなで働くことになって一人で上京。

引きこもりから会社の寮暮らし。いきなり社会人一人暮らしにクラスアップした。

仕事は会社で日本サーバーの テストプレイヤーかつ

家電量販店やネットカフェへの営業。

テストプレイヤーは同僚に元ヒキも多く問題なかったが、営業はキ

ツかった。

理由は人と会うから。でも総合商社の子会社っていう肩書なので結果として参加してくれる取引先は多かった。

時間的にもプレイヤー：営業＝3：7ぐらいの時間比率だったので、合計一か月しかやらなかったが、元ヒキにしては何とか他人と話せるぐらいになった。

そして俺が働くようになって1か月後。ついに正式サービス開始の日が来た。

感想は『早ええ』の一言に尽きるが、欧米の正式サービス開始と合わせたかったらしい。

正式サービスでの仕事として俺にはゲーム内のサクラ的な役割が与えられた。

本来はサーバー管理とかすると思うのだが、まだ見習いレベルの間だからしょうがない。

浅野も当日は参加するとのことで、俺の隣の席と一緒にサクラを手伝うことになった。

本人は取引先が力入れているプロジェクトだからとか言ってたが、実際は俺の事が心配で気を使ってくれたようだ。

忙しい中、子会社まで足運ばせて、浅野マジですまん。

そして正式サービスが開始する時刻になり、

俺や浅野のパソコンが一斉にゲームにログインすると。

ゲームのディスプレイが一斉にもやもやと霞がかった様に不鮮明になり

強烈な光と共に、俺や、浅野を含む数十人は薄汚れた石造りの部屋にいた。

そこで、俺は浅野と話す暇もなく、いきなり槍を持った兵士に首根っこを掴まれると、一番最初に王の前に連れて行かれ、そのまま捨てられた。

あれから城門からちよつと離れた場所に移動した俺は、そのまま座り込んで様子を観察していた。

浅野も出てくるかと思ったが、俺が出てきて3時間がたつというのに誰も出てこない。

辺りは薄暗くなり、人通りが無くなり、道の隅に娼婦だろうか、派手な色彩の服を着た女性がポツポツ立ち始めた。

ああ、こいつは外れだな、連れて行け

王様の汚いものを見るかのような目を思い出す。

あの数十人の中で必要なのは俺だけだったのだろうか。もう肌寒くなった城下町の空気に凍えつつ俺は膝を抱え、ウツウツと声を殺し切れずに泣いた。

無能な三十路ニートだけどエリートがお情けの仕事をくれた(後書き)

ニートとチートって似てる

俺のステータス

???

持ち物

Eシャツ&パンツ…体力+1

Eスニーカー…敏捷+3

Eチノパン…体力+2

無能な三十路二丁だけどヘイシーズが仕事くれた(前書き)

2日目

無能な三十路二トだけどヘイシーズが仕事くれた

朝

俺は城から離れた城壁の近くで目を覚ました。

夜中、城門のある大通りの一角であのまま蹲って泣いていると、やってきた娼婦に、『そこはあたしの縄張りなんだけど…』と言われて『ごめんなさい…』で歩き出した俺。『えぐっ…えぐっ…』としゃくりあげながら、大通りを城に沿って東に歩いて、突き当たった町全体を取り囲む城壁の下で眠っていた。

まだ時間的には日が出たばかりで早いけど、行く所もやる事もないので城門まで移動しよう。浅野や同僚の誰かが出てこれば、何か知ってるかもしれない。

しばらく待っている間に気付いたが、この町の人は朝が早いらしく、日が出たばかりだというのに井戸汲みしている少女や登城する兵士などが散見される。

俺は昨日の経験から、道に立っていると兵士に追い立てられると思い、人の邪魔にならないように城門が見える昨日の位置を確保。ここを縄張りにしてはいる娼婦も当然にすでにいなくなっていた。

俺がいる場所は建物と建物の中のくぼんだ場所であるため、囲まれている建物の各家庭で朝ご飯を用意し始めたのか俺の座る一角までおいしそうな匂いが立ち込めてくる。

その匂いに煽られて、腹の虫がぐうとなる。そこで、昨日の夕方か

ら何も飲み食いしてない事に気付いた。

水でも飲もうかと思い、先ほどの少女が使っていた井戸に近づくが、そばにいたゴツイ男に睨みつけられ追い払われた。どうやら浮浪者は井戸を使えないらしい。

それに涙でぐしょぐしょでさらにキモくなってるであろう俺の顔を見て、とても嫌そうな顔をされた。こんな事なら夜中にこっそり飲んでおけばよかった。

俺は、どうしても水が飲みたくてたまらなかつたので、ここから離れたくはないが、水を飲むため城門の前で丁字路になっている大通りをさつきまで寝ていた東に向け移動する。昨日寝る時に気付いたのだが、火事への備えか大きな水瓶に水が入っているのを見つけていたのだ。大きな水瓶の中の水は蓋がしていないこともあって、枯葉などが底に溜まっている。飲んで大丈夫なんだろうか？ものすごく不安だが、ためにしに両手で水を掬い、一口飲んでみる。：ウマい！生臭い池の水の味を想像していたのだが、冷たいミネラルウォーターのような味がしたため、がぶ飲みする。

水を飲み、城門のそばの監視スペースに戻った俺は、昨日俺の上着を盗っていった浮浪者を発見。奴は城門から横に10メートルほどの位置に陣取って座っていた。

あいつのせいでシャツだけで寒い一晚を過ごすことになったので、文句を言うなり、取り返すなりすればいいのかもしれないが、反撃されると怖いので何も言えなかつた。

動きがあったのは、昼少し前、城門の奥がにわか騒がしくなり、何事かとみていると、俺と同じような現代の格好をした男性が屈強な兵士に担ぎ上げられて連れ出されてくる。

同僚が来たと思い、近づいて話しかけようとするが、よく見ると明らかに茶髪に革ジャンのリア充。同僚ではないようなので遠巻きに様子見をすることにする。なんでかつつと、俺は元ヒキの人見知りなんで。あとあいつの名前を知らないのでリア充と呼ぼう。

どうやらリア充は城の中で気に喰わないことがあったらしく、『これはどう言う事だ』『お前ら絶対に後悔させてやるからな』など兵士に怒鳴り散らしつつ、ポカポカ殴りつけているが、兵士は意に介すことなく門までやってくると外にリア充を放り投げた。重力で負の二次関数に沿った放物線を描いて地面に落ちるリア充。昨日の俺を見てるようでリア充に親近感が湧く。

連れてきた兵士は門の外にリア充を投げ出すと城に戻っていく。リア充は起き上がると怒り狂い城門に突撃したが、走り込んだところを門番に殴られて綺麗なカウンター状態に。門番のパンチを支点に90度綺麗に体を回転させ、倒れた所を暴れ出さないようそのまま肩を右足で踏みつけられ動きを止められた。

すげえ痛そう…しかもあの靴、鉄でできてるから骨折れちゃうよ

気の毒なりア充は鉄の籠手で殴られた鼻が血だらけの噴水状態でもう完全にグロッキー。

兵士が足をどけた後も、倒れたまま全然動かなかった。

どう見てもスポーツマンタイプのリア充がこれなんだから兵士どれだけ強いんだよ…

兵士はしばらくリア充の様子を見ていたが、そのうちにもう一人の兵士に向かって首を振り、仕方ないねと言うように首を竦ませ。

持っていた槍を逆手に取ると。

そのままリア充の胸にどすつと突き立てた……………えっ？

やだなあ、俺疲れてんのかな。見間違えてねえ？

(つ　)ゴシゴシ

…槍が…

(.;。)

刺さつとる！

((。))

口からごぼごぼ血を吹きながらビクビク震えるリア充。
どう見ても致命傷です。本当にありがとございました。

口を開け、呆然と見守る俺。

血を吐いて痙攣するリア充。

門の所定位置に戻り談笑する兵士×2。

大通りを流れて横切る血を何事もないかのように避けて歩く通行人達。

瀕死のリア充の靴を奪おうと足にまとわりつく浮浪者。

ちよwwwコレ何www？

目の前で人間死んでんだけど。

画太郎で言ったらでボタンキュツなんだけど。

英語でsayしたらBatank!

関西風に言ったら人が死んでんねんで!

あつ僕。引きこもりだから知らなかつたんですけどコレ新しいコントですか?

ええそうです。あそこの兵士達も芸人で芸名はエイシーズ。

ですよー。

……現代日本では考えられないような状況に直面し、しばらく意識が混濁し半狂人化していた俺だったけど、気が付くと、リア充は動きを止め、浮浪者は靴を持って去り、俺はエイシーズに手招きされていた。

エイシーズに呼ばれた俺は、弱小動物のサガかその場を一步も動けなくなっていた。

意識が飛んでる時に少しずつ近づいてたのか俺とリア充の距離は1メートル。

エイシーズとの距離は2メートルほど。

その2メートルは俺が進むはとてつもなく遠い。

そして逃げるにはとてつもなく短い。

それでそこにぼけつと突っ立ってる。

頭真っ白……何も考えてない真っ白……

俺がそのまま動けなくなってることに気付いたのか、エイシーズが近づいてきて、

俺の肩を叩いたり、頬を軽く張ったりして正気を取り戻させる。

ああ、と気づいて愛想笑いすると、ヘイシーズ様は

「この死体を墓地まで運んでくれ。礼は払う」と仰られました。

墓地でございますか。わたくしめが運ぶんですか？

しかしながら旦那様方、わたくしめは墓地の場所を知りませぬ。

ああ、なら町の外に放っておけばいいと。

それに身に付けている物は好きにしたいと？

そう言われて、自分が死体処理という仕事を請け負おうとしているのに気づきました。

死体処理という仕事。

さすがに抵抗があり、だんまりしてしまう俺。

ヘイシーズは俺がまだ死体を怖がってると思ったのか、リア充の着ていた革ジャンを剥ぎ取り、笑顔で俺に着せて、「な、もう死んでるから怖くないぞ」と背中をポンポンと叩き、落ち着かせてくれる。

断るべきだ。こんな事願い下げだ。

何より、こいつらは人殺しだ。

言え、言うんだ。断るって言うんだ。

そう思った俺が口を開いた時、リア充から剥いだ革ジャンについてた血が、『つつつ』と俺の右腕を伝って流れていく。

結局、口から出た言葉は

「わかりました旦那様」

という、愛想笑いのこもった見下げ果てた一言だった。

ヘイシューズから薄汚れた布を貰った

俺はリア充を東の城壁の外に運ぶため、薄汚れた布の上にリア充を載せると落とさないようにズルズル引きずって運んで行った。

途中、通行人の綺麗な女性俺を見る目がゴミを見るみたいで辛かった。

東門から来たおじさんたちはすれ違う時に明らかに嫌そうに俺を避けた。

恥ずかしいのと辛いのを誤魔化すため、俺は自分をキリストだと考えた。

リア充は十字架で俺は磔にされるためゴルゴダの丘に登ろうとしているのだ。

そのためにリア充を運んでいるのだ。

人々の目は蔑みじゃなくて憐憫なのだと考えた。

そういうプレイだと考えた。

いざそう考えると、リア充からはぎとった革ジャンに付いていた血が袖から落ちていくのが、俺が拷問を受けていたみたいで興に乗った。

そう考えていたら、半分ほど行ったところから辛さはあんまりなくなっ

城壁を出るころにはまるで英雄になったかのような気分だった。

ヘイシーズには外に放っておけばいいと言われたけど。

リア充から剥いだ革ジャンがリア充の払った埋葬料に思えてきて落ちていた木切れを使って穴を掘った。

リア充が死んだのは昼前だったはずだけど、終わった時には夕方だった。

穴に入れる前に、リア充の服をどうしようか思ったけど、血まみれのシャツ以外は埋葬料としてもらうことにした。

リア充も埋めてもらったんだから文句は言わないと思った。

埋葬を終えて、城門に帰るとヘイシーズのリア充を殺した方が俺を待っていた。

交代の時間は過ぎていたけど、俺の帰りを待っていてくれたらしい。リア充を埋めてきたと伝えると、ありがとう、と感謝されて見たことないコインを10枚ほど貰った。

いくらぐらいの金額かわからないけど、わざわざ俺を待っていたほどだから適正な金額なんだろうと思った。

俺は礼を言って、監視ポイントに戻った。

ヘイシーズはそのまま家に帰って、しばらくしたら門は閉じた。

門が閉じて、人通りが無くなると、リア充の事を考えて涙が出てきた。

『俺は昨日も泣いたのに、今日も泣くんだ』と思った。
血の乾いた布にくるまり、我慢して声を殺して泣いた。

気が付くと、ここを縄張りとしている娼婦が俺に背を向けて立っていた。

俺が急いで場所を移ろうとすると、泣いている俺を憐れんだのか『そこにいていいよ』と言われた。

彼女の顔を見ると、今日、俺が昼にリア充を運んでいるときにゴミを見るような目で見ていた女性なのが分かった。

あんなに綺麗なのに娼婦だったんだと思った。

俺は彼女が男に買われていくのを見届けると泥のように眠った。

無能な三十路二一トだけどヘイシューズが仕事くれた(後書き)

俺のステータス

???

持ち物

E シャツ&パンツ ∴ 体力 + 1

E スニーカー ∴ 敏捷 + 3

E 革ジャン ∴ 防御 + 5

E チノパン ∴ 体力 + 2

E 革ベルト ∴ 魅力 + 1

血だらけの布

謎コイン × 10

(死んだリア充の糞尿まみれ品)

ジーンズ ∴ 防御 + 3

ボクサーパンツ ∴ 腕力 + 1

用語等

リア充 ∴ リアル(現実)が充実している人の事

無能な三十路ニートだけど自活を試みた(前書き)

前回のあらすじ

適当に書いた作品が1日でガチ作品のユニーク記録更新して泣いた

3日目

無能な三十路二一トだけど自活を試みた

朝起きると同時に猛烈な空腹を感じた。よく考えたらこの世界に来てから三日もたつが、口にしたものと言えば防火用の水瓶の水ぐらいなので当然といえは当然だ。城門はまだ閉まったままで、ある程度日が昇るまでは動きがなさそうなので食事を探しに行こう。このまま待っているだけではいつか死んでしまう。

まず手始めに、俺は街中のゴミ箱がないか探すことにした。昔読んだ元ホームレス社長の本に、空腹で苦しんでいる時にゴミ箱を漁って残飯を手に入れる話があったのでそれを参考にしたのである。

血だらけの布とリア充の汚物にまみれたジーンズなどを丸めて監視ポイントに隠すと、とりあえず城門前のＴ字路を南に、町の中央に向かって歩き始めた。

途中、登城する軽装鎧姿の兵士や朝早くから仕事場に向かうのであるろう小ざつぱりとした青年たちとすれ違いながら、アメリカの街のようなゴミ箱がないか探しながら歩いているが、それらしき物はまったくくない。中世ヨーロッパの様に窓からゴミを投げ捨てる方式なのかとも思ったが、それも違うらしい。どうやらごみ収集のシステムなり、処分方法がそれなりにあるようで十字路で見つけたオープンテラスを持つ飲食店のような建物の外にも、ゴミ箱は存在しなかった。

「飲食店があるなら、もらったコインで食事できるかも」

一人呟いて、建物を見るが、中は明かりも灯っておらず、人の気配もない。

後でまた来てみよう。

町の中をこれ以上歩いてもしようがないので、とりあえず元来た道を戻る。

帰る道すがら、昨日リア充を埋めている時、ちょっと離れた場所に小川が流れていたのを発見した事を思い出した。『魚でもとれれば』と思っただけに行く事にする。ついでにリア充が死んだ時に漏らした糞尿まみれのパンツの洗濯もしようと、隠しておいた荷物を回収してから向かう。

東の城壁に着くと、ちょうど兵士が城壁を開けるところで、他の町に向かうのである。荷馬車や行商人がたむろして開門を待っていた。

その中に俺の目を引くおかしな集団が居た。

てんでバラバラな鎧やローブを身に着けたそいつらは、弓や剣を背中に背負っている者もいれば、人の握りこぶし程の青いガラス球をはめ込んだ杖を持つ者もいて、明らかに周りとは纏っている雰囲気が違う。

門番や城の兵士であれば、白地のマントと左胸に紋章が刻まれた鎧をした格好のはずだが、そういうったものもない。

興味がわいてじろじろ見ていると、向こうも気づいたのか、こちらを見てきたので慌てて目をそらす。下手にケンカになってリア充の二の舞になるのははごめんだ。

もし、俺が浅野だったならば、目があった瞬間に挨拶して取り入って、彼らからいろいろ話を聞けるんだろうな。それで持っているコインと引き換えに食事も手に入れてたのかもしれない。そう考えると、つくづく俺のコミュ障ぶりが嫌になってくる。

俺がそんなせせこましい事で悩んでいるうちに、ついに門が開かれ、彼らは俺にそれ以上興味を持つことなく外に出て行った。

俺は、荷馬車や商人たちに先に行かせ、一番最後に付いて行き、川に差し掛かったところで橋の下に降りた。

川はそれほど大きくなかったが、ところどころ、水が深く緑色に見えるところがあり、中に入るのは危険な気がしてやめた。俺は小学校から体育が2で泳げないのだ。そんな訳で、ひざ下ほどの深さのところには10センチ程の小魚の群れが居たので掬おうとするが、逃げられる。石を投げてもあたらないので止めた。

魚を諦めて、くるぶしほどの深さの所で石の裏に何かいないか探している。沢蟹が居た。

慌てて捕まえようとすると、沢蟹は俺を挑発するかのよう左右に小刻みにステップしつつ逃げ回り、追い掛け回すと緑色の深い場所に逃げて行ってしまふ。

そいつを諦め、元の場所を探していると、また同じような沢蟹を2・3匹見つけたが、みんな似たような動きで挑発しつつ水が深い所に逃げていく。どうやら逃げるのに慣れていているらしい。それに挑発までするとは沢蟹の癖にある程度の知性があるみたいだ。甲殻類の分際で。

動き回り疲れた俺は、先に洗濯をすることにした。

まず、糞まみれのボクサーパンツをじゃぶじゃぶあらう。

洗剤がないのが残念だが、近くにあった石に汚れ部分を叩きつけながら洗うと、かなり綺麗になった。ついでに濡れたボクサーパンツで革ジャンの血を拭くと、内側のシミは残ったものの、血の匂いはほとんどなくなった。

パンツと同じようにジーンズも洗った。ジーンズを洗っているとき、川の中央で魚でも跳ねたのか、『ぱしゃん』と音がして大きな波紋が走った。俺は某漫画の奇妙な冒険を思い出して『深緑水色のオーバードライブwwww』などと呑気に一人でウケていた。

ジーンズとパンツを洗った俺は血だらけの布も洗うことにした。布はリア充を運べるだけあって結構デカイ。幅1M長さ2Mぐらいの大きさだ。

軍で使ってたのかボロボロでも丈夫で、新品なら結構高いと思うのだが、リア充を運んだ後、返そうとしたらそのままくれた。

ふあさつと広げて水に漬けると、血の跡が水を吸い込み、成分が溶けて薄い赤色の液が染み出てくる。手もみ洗いしようとするが、水深の浅い場所では石に布が引っかかり、うまく洗えない。何よりデカイし。

結局、膝ほどの水深の所で、川の流れに鯉のぼりの如く流す感じで布を伸ばし左右にフリフリ振って適当に洗うことにした。

あそーれ、ふーりふり。

ふーりふり。

そんな感じで半分遊んでいると、布が何かに挟まったのか、いきなりガチツとした手ごたえがあり、布がぴんと張った。なんじゃこりゃ。根がかりかよ。

引っこ抜くために思いっきり引っ張るが、びくともしねえ。

近くの大きな石に左足を掛け、体を45度に倒すようにして足を踏ん張り、持てる力をすべてつぎ込んで引っ張ると、ググツとゆっく

り動き始めた。一旦動き始めた後は普通に引つ張ればゆっくりながらも動くようになったので、そのままスローモーシヨンな動きで水深の浅い方へ移動。

布を見ずに、2メートルほど歩いたところで水深が浅くなったので布の方を振り向くと。

大型犬並みの大きさの、足が何十本もあるカニもどきが、シェパードの頭ほどの4つの鋏を使って布にしがみついてました。

「うわああああ！」

叫び声をあげ、布を離し猛ダツシュで陸に上がる俺。後ろでは半分体を水の上に出したカニもどきがキシユキシユ鳴いてる。

そのまま置いてあったジーンズやパンツを手に取り、街道に上がり、橋の上から川を覗いてみると。

十匹以上という数のカニもどきが俺の居た浅瀬を囲んで水中で半円陣を組んでおり、そのうち一角では俺の洗っていた血だらけの布を取り合い、カニどもが争ってスタスタにしていた…

どう見ても、俺を捕食する気満々でした。本当にありがとござい
ました。

そうかー。さつき沢蟹たちが挑発しつつ水が深い所に逃げたのは、俺を襲わせるためだったのかー。いや、びっくりだわー。というか、あんな生き物がいるのがびっくりだわー。

しばらく橋の上から見続ける事2分。カニもどき達は布を切り刻んで食い終ると、再び半円陣を組んで獲物を待ち構えていた。こんな状態じゃ何もする気がしないので、俺はスゴスゴと城下町に戻った。

城下町に戻ると、俺は荷物を隠し、先ほどの飲食店に行ってみることにした。

ポケットには謎のコイン十枚。どれくらいの価値かはわからないけど、少なくとも軽食は取れるはずだろう。

飲食店に着くとオープンテラスには4・5人の客がおり、食事をしているのが見えた。どうやら営業しているようなので、店の入口から中に入ったところ、そこにいた青年に止められた。

「すみません、食事したいんですが…」

青年にビビりつつも、自己主張する俺。

「申し訳ありませんが、当店は現在満席です」

笑顔を崩さないが断固入店を拒否する青年。

どうやら俺を浮浪者と思ってるらしい。まさにその通りだけど。

「いや、お金はあるんですよ」

昨日ハイシーズに買った謎コインを見せるが、青年はそのコインを見るところ。

「残念ですが、それだけのお金では『何も』買えませんよ」
そう冷笑してお帰りくださいと俺を礼儀正しく入口から追い払った。

今日も、城門から浅野は出てこなかった。

閉じた城門を見て俺は頭を抱える。

唯一の知り合いであるヘイシーズに土下座でもしてパンでも分けてもらおうかと思っただけ、門番は違う人に変わっていた。勇気を出してヘイシーズの事を聞いてみると、昨日問題を起こしたので配置換えされたらしい。

どうやら、さすがに事故とはいえ殺人は問題だったようだ。

この世界にもある程度の倫理観があることに安心するが、そのおかげで食事を得る最後の道が断られた。

食事を取ってない状態で昨日今日と動き回ったせい、あまりの飢えに吐き気がこみ上げてくる。

これは早く浅野が出てこないともう死ぬかもしれん。

いや、浅野が出てきたところで浅野が金や食い物を持っている保証はないので同じか。

薄暗くなるに従い、何らかの動力で動いてるであろう大通りの街灯が淡い白い火を灯し始めた。

人通りが無くなってきた大通りにまた派手な服の娼婦がポツポツと

立ち始める。彼女らが一定間隔で設置された街灯の下に立つ光景はなんだかファッションショーのようで、この世界はなにかのイベント会場なのかとも思えてくる。

俺も女だったらあややって食い扶持稼げたのにな。

そう思ったが、俺のキモイ見た目は女になつたところで変わらずに誰も買わないと思ひ自嘲して笑う。あそこにいる娼婦たちでさえ、それなりに美しいにもかかわらず、今朝起きた時にまだ売れていない女性がちらほらいたのだ。それに比べればここにいた女性は浮浪者の前というハンデにもかかわらず、すぐに買われたのだからよほど売れっ子だったのだろう。

彼女の事を思い出していたら、道の向こうから来る彼女を見つけた。俺は彼女に場所を明け渡すために荷物を取った。そしてその場に立ちあがるうとしたが、空腹で力が入らず、その場でしりもちをついてしまった。

彼女は真っ直ぐに俺の方にやってくると、もたもたしてる俺の前にポンと何かを投げ出した。布に包まれた何かだった。

俺が彼女を見ると、彼女は口だけで微かに笑い、俺に背を向けてそこで客を待った。背が高く背筋がピンと伸びていてカッコよかった。茶色の髪をアップにまとめ、毅然としていて『私は何も恥ずかしい事をしていない』と言っているかのようだった。

俺が布の包みを開けると、中には黒いパンにサラダ。少しばかりの肉も入っていた。

驚いて彼女を見るが、モデルのように凜とした雰囲気の彼女に声を掛けられず、心の中で何度も何度も礼を言った。

彼女は30分もしないうちに中年の男に買われていった。
昨日と違い、でっぷり太った男だった。

俺は彼女が男と連れ立って歩いて行き、姿が見えなくなるのを待って、パンを食べた。

パンは最初は驚くほど硬かったけど、噛んでるうちに柔らかくなった。

無能な三十路ニートだけど自活を試みた(後書き)

無理ゲーだと燃えるタイプ

俺のステータス

??? (なんか回復したらしい)

持ち物

Eシャツ&パンツ ∴ 体力 + 1

Eスニーカー ∴ 敏捷 + 3

E革ジャン ∴ 防御 + 5

Eチノパン ∴ 体力 + 2

E革ベルト ∴ 魅力 + 1

謎コイン × 10

ジーンス ∴ 防御 + 3

ボクサーパンツ ∴ 腕力 + 1

バスケット&布

売れっ子娼婦だけどピンチに陥った／薄毛な三十路二一トだけどリンチ見た（前

後で文章の細かい描写とかを直すかも、いつもの事だけど。

三日目の夜半～4日目の未明

売れっ子娼婦だけどピンチに陥った／薄毛な三十路二一トだけどリンチ見た

いびきをかきながら私を優しく抱きしめる男の腕をそつと外すと、男を起こさないようにベットを抜け出す。立ち上がると途端にトロリと男との行為の残滓が漏れ出し、それが『つつつ』と太腿を伝いやや不快な気分になる。

私は高級そうな絨毯が敷き詰められた床にこぼさないようにやや内股気味に歩き、男の家に備え付けられている浴室に入ると、まだ温かい浴槽のお湯を手桶で汲み、自分の体を隅々まで洗い流す。

今夜の客は『当たり』の客だった。

娼館で囲われていた時からのなじみの客だが、私が娼館から放り出され街角に立つ様になった後も、私を探し出して買い続けている『太客』である。

一般的庶民の家にはこうした浴室はなく、共同浴場を使うカタライに入れたお湯を使って体を拭くぐらいの事が精いっぱいだ。しかし事務方の城勤めでかなりの地位にいると寝物語に話した男の家には浴室も用意されているし、造りがしっかりしているためか防音も完璧で、夜中でも周辺の住民を起こす気遣いをすることなく活動できる。

それに行為自体もタンパクだし、寂しがり屋なのだろう。性欲を満足させることより、私に仕事場で起きた出来事や人間関係などの取りとめのない話をする事を好んだり、優しく抱きしめて背中をさすられることを望んだりとただ甘えてくる事も、私が彼を『好いている』理由の一つだ。

もちろん男が支払う『破格の』報酬も魅力的ではあるけども。

浴室で体を洗い終え、寝室のソファの上に脱ぎ散らかしていた私の服をかき集めていると、男が目を覚ましてしまった。

「ん…行くのか…？」

私に手を伸ばし、寂しそうに男が問いかける。

「ごめんねえ、ちょっと気になることがあって…」

下着を着ながら、男が私を撫でられるようベットの枕元近くに腰かける。

途端に男は嬉しそうに大きな体を揺らして体を寄せてくる。

「行かないで欲しいな…」

彼は私を行かせまいとするかのように、腰に手を回してくる。

私はただ静かに、優しく笑いながら服を着る。

ねえ、街角に立つぐらいなら僕の愛人にならないか

初めて私を探しだした時と同じ言葉を彼は口にする。

こつこつと事を長く続ける気はないの

私もあの時と同じ言葉で彼に返答する。

そして見た目と違った彼の純粹さを思い出してズキリと少しだけ心が痛む。

着替えが終わり、立ち上がった私は彼の額にキスをしてお別れの挨拶をすませる。玄関に向かう途中に彼の『カギは気にしなくていいから』という声を背に受けながら私は扉に手を掛けた。

外に出るとまだ湿り気を帯びている私の肌を、寒い夜の風が撫でていった。

こんな寒い中でよく野宿なんかできるものだ。

私はここ数日、目にするようになった男の事を考え、そう思った。

初めて見かけた時、明らかにこの世界に来たばかりであるらしい地球の服装をしたその男は、仲間とでもはぐれたのか膝を抱えて一人で泣いていた。

その姿に私は気の毒だなとは思ったが、縄張りに居られると邪魔なので彼に話しかけて移動してもらった。彼は泣きながらも『ごめんなさい…』と呟いてどこかに歩いて行った。すごく悪い事をした気分になった。

次の日、まだ日が昇って間もないころ、客の家から帰る私は縄張りに座っている彼を見つけた。彼は城門を凝視しており、私に気付かなかった。どうやら、城から誰かが出てくるのを待っているらしいかった。

そして家に帰った私が昼ごろに市場に向かうと、彼は血だらけの死体を引きずって歩いていた。死体の格好も地球の服装で、彼の仲間の一人かもしれないと思った。そしてその前の日に彼を追い払った事を思い出して、彼の仲間を自分が殺したみたいですごく嫌な気分になった。

その日の夜、縄張りに行くと彼は血だらけの布にくるまって泣いていた。

私が立っている事に気づいて、場所を移動しようとしたので、『そこにいていいよ』とだけ言っておいた。顔を見ると、死にそんな顔をしていた。『食事もとってないのかな』と思った。

なので今日、仕事に出る前に余っていた食材をバスケットに詰めて彼に渡すことにした。初日に冷たくしてしまつたお詫びの気持ちだった。

彼は渡した食事に喜んでいたようだったが、私の仕事の邪魔をしないように話しかけては来ず、食事も私がいなくなるまで手を付けなかつた。

私は彼をなぜか放っておけない気分になってしまつていた。子供の頃、公園で纏わりついてきたネコにエサを与えたら、愛着がわいてしまつた。それに似た感情を持つてしまつた。

そしてあの客と一緒に寝ている間に彼の事を思い出し、彼が仲間を見つけるまで、食事の差し入れだけでも続けてあげようと思つた。

だから、私が再び縄張りに戻つたのは、彼に渡したバスケットを回収するため、それ以上の意味はなかつた。

シスたちはそうは思わなかつた。

彼女は北の高級住宅街を根城にする娼婦達のリーダー的な存在で、最初私が此処に来た時には、娼館から追い出された私の境遇に

同情して縄張りを融通してくれたり、危険な客を教えてくれたりなど、何かと面倒を見てくれた。街角で客を取ることは娼館と違って難しかったけど、彼女に教えられた通りに客を見定めている内に、コツをつかんだ。

すぐに私を見染めた客や娼館時代の客がポツポツつくようになり、私も彼女らに対して、感謝の気持ちから、客からもらった報酬以外の贈り物やデザートなどを分け合ったりするようになり、彼女らからはとても感謝された。彼女らの仲間になれたと思った。

でもそれは長く続かなかった。

きっかけはシスの馴染みだった輸送商会の若旦那が、私を買ったことから始まったと思う。その日はたまたまシスが休んでおり、彼女の普段の居場所にいた私を彼の出した新人の使いツ走りが連れて行ったのは、明らかに偶然が重なった結果だった。

それでもシスは若旦那が私を買ったことに対して、内心面白くない感情を抱いているようで、私に対してよそよそしくなった。

私は彼女に対して心の中で謝りつつ、仕事を続けた。

それからしばらく経って、シスや他の娼婦に客が付きにくくなっていく事に気付いた。

秋が深まり、寒くなってきているので客足も途絶えがちなせいだと思うのだが、彼女らにとっては、私が彼女らの馴染みを『奪っている』ように思えたらしい。

実際に私に乗り換えた客が居るといふ噂まで耳にした。

その内に顔を合わせるたびに敵意に満ちた目で見られるようになってた。シスと仲がいい娼婦などは、私が陰で何人も客を取っていないか明らかな探りを入れてくる程だった。

それからというものの、私は『一晩に客を一人だけ』取るとわざわざ遠回りして縄張りを避けて家に帰るようにした。仲間内で許されているのは一晩に2人だが、彼女らをこれ以上刺激したくなかった。

実入りが減った分は自分の値段を上げる事である程度補填できた。

シスも私が自制している事に気付いたのか、最近ではそれほど敵意を向けられることはなくなっていた

私は正直気が緩んでいたんだと思う。

バスケットを回収するため、大通りを北に進んでいった私がふと後ろを見ると、シスの腰巾着で有名な娼婦が私の後をついてきているのが分かった。

彼女も帰り道かなと思いつつ、そのまま歩いて行くと、城門の前のT字路で西側の大通りを塞ぐ様に3人の娼婦が並んで立っており、こちらをじっと見ていた。

それを見て急に怖くなった。

同時に私は彼女らの視線が放つ意味を明確に理解した。

シスは私を許してなんかいない。

さっさとバスケットを取ってここから移動しなきゃ。

そう思い、早足で大通りを東に曲がると、その十数メートル先にある私の縄張りの前に、よく見慣れた黒髪のショートヘアの女性が立ちはだかっていた。

私が恐怖で足を止めると、周りの娼婦の輪は狭まって来た。

シスは私を手招きして優しくそくに笑った。

っ加減にしなさいよっ！

まだ真夜中だった。

女の声で目を覚ました。

貰った飯を平らげた満足感と疲れから監視ポイントで惰眠をむさぼっていた俺。

怒鳴りつけるような声に危険を感じ、身じろぎもせずには辺りを窺うと、俺の居るところから5メートルほど離れた大通りの真ん中で人が集まっており、何か揉めているのが分かった。

注意深く見ると揉めているのは数人の娼婦だった。

どうやら5・6人で一人の娼婦を囲んでいるらしく、その真ん中の娼婦に向かって。

「アンタねえ、売れてるからって一日に何人も客取られたらこっちが困んのよ！」

「ルールってものがあるでしょ。ルールってものが！」

などと集団で詰め寄っている。

糾弾されているその娼婦は、周りの娼婦に怯えているのか小さな声で、

『あたしはただ…』

『…に來ただけで…』

などポソポソ呟いているがその気弱な様子が集団を更にイラつかせているようで、声を出すたびに彼女への罵倒は強くなっていく。

しばらく聞き耳を立てて状況を推測するに、彼女が客を総取り状態だったため、この所お茶引きが続いた娼婦たちがキレたらしい。水商売の話によくあるNo.1へのやつかみと言ったところだろう。この世界の女の嫉妬も元居た世界と似たり寄ったりで恐ろしいようだ。

それにしても、そこまで人気が出る娼婦ってどんななんだろうと思い、街灯の薄明かりに照らし出されている彼女の顔を見ると、なんと俺にさっき飯をくれた娼婦だった。

…そう言えばここは彼女の縄張りだったな…

可哀そうだなとは思うが、娼婦にも娼婦の暗黙の了解と言うものがあるので仕方ないかと思っただ。昔から娼婦と言うのは下賤な職だと思われているため、世間の風当たりが強く、互いに協力しなければ生きていけないため、ルールを破るものはリンチされる事もあったらしい。自由競争に慣れた現代人からすると、理不尽な気がしないでもないが、どんな娼婦だって生活が懸かっており生きるために必死なのだ。客を分け合うという暗黙の了解によって彼女らのセーフティネットは守られているのだ。

そう俺が娼婦のコミュニティについて考察している間にも、娼婦た

ちの彼女への罵倒は一層激しさを増していった。

「大体ね、アンタ勝手にこっちに来て色々やってるけど迷惑なんだよね」

「元々は娼館で雇われてたのに、そこでも問題起こしちゃったんだって？」

「いるよねー。どこでも行く先々で問題起こすやつ。常識ないのかなー」

「キャハハハ、酷ーいｗｗｗｗ」

彼女は最初から明らかに争う意思がないが、娼婦たちは気が収まらないようで、延々と彼女を罵倒し続ける。

俺に飯をくれた時の彼女の毅然としていた雰囲気はすっかり無くなり、背筋も心なしが丸くなっており、下を向いてポソポソ『ごめんなさい』と言いつける姿は完全に苛められっこの体勢です。ライフはゼロ。言い訳もゼロ。もう無条件降伏状態…。

そんな彼女の様子にもかかわらず、ヒートアップした娼婦のリーダーであろう黒髪のショートヘアーが彼女を右手で突き飛ばすと、周りの娼婦も一斉に手を出し始めた。丸まって頭と顔を守る様に蹲る彼女。困んでフクロ口にする娼婦。もうすでに反撃するつもりもない女にそこまでするのはさすがにやり過ぎじゃないか？

その様子を見ていて思ったが、もしかして、俺の事もあって彼女が突き上げを食らっているのか？

飲食店で俺が入店を拒否されたように、本質的にはサービスマンと同じ客商売である娼婦にとって、居るだけで客が寄り付かなくなる浮浪者は何としても排除したいだろう。なので初日に俺が此処にいた時、彼女は俺に縄張りを主張して退かそうとしたし、実際、夜のこ

の大通りには俺の他に浮浪者はいない。そんな中、彼女は俺が此処にいるのを許してしまっていたし、彼女が俺に食事を渡して『餌付け』していたので、他の娼婦にとってみれば浮浪者を呼び寄せているかのように思えるだろう。そうでなければ、ここまで痛めつけられる謂れもない。

そう考えると、彼女に対して本当に申し訳ない気分になってきた。止めよう、助けようと思って立ち上がるうとして、リア充の事を思い出した。

感情に任せて、無謀な行動をして死んだリア充を思い出した。立ち上がるうとした気持ちが、自分の中で急激に萎えるのが分かった。

何とか彼女を助けてやりたい。でも下手に俺が止めても彼女のこれからの立場が悪化するだろうし、何より運動不足ヒキニートだった俺の腕力では娼婦にも負けるだろう。

その内に、あいつらも飽きてやめると。別に殺されるわけじゃない。そこまでやらないはず。俺が行ったら逆に迷惑になるし。俺は弱いから助けられないし。

頭の中では、言い訳が渦を巻いている。

俺の目の前で彼女は丸まってただ耐えている。

言い訳もせず、手も出さずに、身を守ってただただ耐えている。

俺は彼女から隠れるかのように寝返りを打ち、彼女に背を向ける。靴先が足元に置いていたバスケットに当たってバスケットはからんと音を立てて転がった。

中身がカラのバスケットは小気味いい澄んだ音を立てた。

俺が見る景色の視点が急に高くなった。
何してるんだ、どうするつもりなんだ？
急に立ち上がった俺に俺が問いかける。
力じゃ敵わないし、俺は一人だぞと問いかける。
力以外に何かできるだと俺は俺に反論する。
キモイだけが取り柄のお前には何にもできねーよと俺も反論する。

キモイだけが取り柄とかゆーな！
そう俺は俺の顔面に右こぶしを叩きつける。
吹き出す鼻血。のけぞる俺。

自分の中の何かに踏ん切りをつけて
開き直った俺は来ていた革ジャンをその場に投げ捨て
真っ白な肌着とチノパンだけになり、娼婦の集団に向け歩き出した。

売れっ子娼婦だけどピンチに陥ったノ薄毛な三十路二一トだけどリンチ見た(後

禿^{ツル}の恩返し…

俺のステータス

??? (状態・鼻血)

持ち物

E シャツ&パンツ…体力+1

E スニーカー…敏捷+3

E チノパン…体力+2

E 革ベルト…魅力+1

謎コイン×10

革ジャン…防御+5

ジーンズ…防御+3

ボクサーパンツ…腕力+1

バスケット&布

無能な三十路二一トだけど、恋をした（前書き）

4日目の未明

無能な三十路二一トだけど、恋をした

怒りに満ちた男の剛腕が唸りをあげ、俺のみぞおちにクリーンヒットする。

そして数秒の沈黙の後、自らの胃液にまみれた冷たい石畳を顔面に押し当てる様に、俺はゆっくりと崩れ落ちた。

立ちふさがる男の向こうではリンチを受けていた茶髪の娼婦が数人の人影に囲まれて座り込んでいる。

倒れ行く俺の目に一瞬彼女の顔が映り、その悲しそうな表情にっられて、俺は興奮して頭に上った血がゆっくりと引いてゆくのを感じた。

男は倒れた俺を無視し、彼女に近づくと手を取り、ゆっくりと立ち上がらせる。

俺が始めた彼女を助けるための戦いは、結局、俺が地面に倒れ伏すことで一応の決着を見たのであった。

〜何かが吹っ切れた後についての俺の回想〜

あれから、娼婦の集団に立ち向かったカツコいい俺。

相手は5人。こっちは2人。しかもその内一人は戦意喪失中。まるで本能寺の信長を助けようとする森蘭丸ぐらいの絶望的状况だ。

そんな完全に勝ち目がない戦いに臨んだ俺の狙いは、黒髪シヨート。敵のリーダーを叩いて指揮系統を潰しせめて茶髪だけでも逃がそうという作戦だ。

とりあえず奇襲して相手を混乱させようと考えた俺は、いきなり黒

髪ショートを背後から羽交い絞めすると、全力で引っぱって茶髪から引き剥がそうとした。結果は力及ばずほとんど動かせなかったものの、『ひゃいん!』と奇声を上げて黒髪ショートは茶髪への暴行を停止。

振り返る様にこちらを見て、自分が鼻血を垂れ流した浮浪者に抱き着かれています事を理解すると、俺の見た目がよほどキモかったんだろうな。全力で暴れ始めた。

必死に暴れる彼女を全力でハアハア息切れしながら押さえつけていると、周りの娼婦も俺に気が付いて茶髪への暴行を止めた。こいつらに一気にこられるとそれだけで詰む。これはヤバい…が、あいつらは俺を見てるだけで何かしようとする気配はまるでねえ。どうやら人の指示がないと動けない指示待ち族らしい。

これはチャンスだと思い、そのまま状況が把握できず、呆けて俺を見る彼女らが手が出せないよう、体を黒髪ショートに密着させて彼女を押さえつける内に、俺の手が彼女の豊かな双丘に『偶然』タッチしてしまった。これを読んでいる女性読者に見れば『そんなの狙ってやってんでしょ。マジ最低…』と思うんだろう。しかし、これはホントに偶然だった。信じてほしい。

俺はその時の『むにっ』とした手触りが気になり、知的好奇心をくすぐられ、2・3度さらにタッチして感触を確認する事にした。これは先ほどと違い意識的な行為であるが、あくまで感触を確認するだけの知的で簡単な作業である。

下心は決してなかった。だから女性読者は俺をゴミの様に見ないで頂きたい。

感想としては

『うひゃあああああ、柔らけえええええ』

女の胸ってこんなに柔らかいの？』
といった所だったろうか。

俺は感動した。

中学のマイムマイム以降、久しぶりに触れた女性の体の柔らかさに、そしてどうせ負けてボコボコにされるならと、髪の毛の匂いを嗅ぎながら彼女の体の前でクロスした両手で胸を揉みほぐすセクハラ攻撃を敢行すると、黒髪シヨートは『嫌ああああ！』と嫌がった。それはもう盛大に嫌がった。

その嫌がり方にさらに俺は興奮。胸のドキドキもクライマックスに達し、揉む速度も当社比120%ほどに上昇した。正直に言つと、心なしか俺の体も、ちよつと『おっき』していたと思う。ちなみにクンカクンカしたシヨートな黒髪はいい匂いだった。

そうやって後ろから抱きしめる様に揉み続けていると、口では嫌がる黒髪シヨートだったが、体は俺のテクニクにメロメロになってたんだろつな。俺に肘鉄を加えようとぶんぶん振り回していた手も、胸を抑えるような可憐なしぐさになり、抵抗を弱めると同時に体を前かがみにして態勢を崩し始める。

その姿はまるで恥じらう乙女。マジ乙女www
おっさんに後ろから抱き付かれてるけどwww

彼女の態勢の崩れを感じた俺は、ついでだからこの柔らかい胸に顔を埋めてやろうと、その場に押し倒すべく奮起したが、それを敏感に察知した黒髪シヨートは必死で耐える。俺も全力を尽くしたが、惜しい事に力が足りず、ジタバタしてる間に我に返った他の娼婦に引き剥がされ、地面に突き飛ばされた。

黒髪シヨートは俺のテクニクで明らかに感じてたのに…今考えても空気の読めない奴らだと思つ…

地面に尻餅をつき、痛ててと尻をさすりながら目を向けると、いきなり男に襲われたのがショックだったのか、彼女らのリーダーは俺に怯えて半泣きになっていた。その場に座り込んで両腕で胸を隠すしぐさに俺はさらに興奮。

カワイイ…可愛いよ黒髪ショートたん…

涙ぐむその顔に萌えええええええ！

って気分でダメージを回復。

彼女を守る様にその前に立つ4人の娼婦をもつとせせず、俺はゆらりと立ち上がると彼女に向かって全力疾走した。

しかし、俺が狂おしいほど愛を全開にしているにもかかわらず、黒髪ショートたんは悲鳴をあげて慌てて逃げた。

彼女を守ろうとしていた娼婦達も、鼻血を垂らしながら笑顔で向かってくる肌着姿の俺に正直触れたくないんだろうな。

俺が近づくと蜘蛛の子を散らすように逃げてったwwwwww

チラリと彼女らの顔を見た感じでは、黒髪ショートたんより格段に劣る容姿だった。だからターゲットを変更せずに黒髪ショートたんの追い掛け回していたけど、大通りから少し行っただけの住宅街のわき道を追いかけている内に見失ってしまった…

くそう、逃げられたのはあの4人のせいだお！

逆ギレし、あいつらで我慢しよう大通りに取って返したが、姿はすでになく、黒髪ショートたんの叫び声を聞きつけた近隣の住民が外に出てきており、リンチされて倒れていた可哀そうな茶髪を介抱している所だった。

何となく残念な気持ちで俺がそちらに歩いて行くと、なぜか住民に

とっ捕まった。

どうやら、俺が茶髪を暴行したのだと思っっているらしい。おそらく上半身肌着に鼻血を出している見た目が原因だろう。これは誤解を解かねばと思い。

「いえ違います、茶髪は違う人がやって、僕は黒髪ショートが本命です」

黒髪ショートたんへの興奮冷めやらぬ中、俺は紳士的にそう説明した。でもなぜか理解されずに、おととい井戸で俺を追い払ったゴツイ男に強烈なボディブローを貰うハメになった…

俺はそのまま兵士の詰所に連れてかれそうになった。

詰所って事は警察みたいな感じだろうか？

てことは牢屋に入れられる？牢屋と言えば城の中だよな。

そう思い、結果的に城の中に入れるかもと地面に転がりつつも心の中で喜んだ。

頭の中では取らぬ狸の皮算用。

『ひよっとしたら飯も食えるかもウハウハ』

『日本でも食えなくなったら刑務所入ればいいんだ』

『俺はなんて頭がいいんだ』

などと考え、予想外な方法での現状打破に俺は喜んだ。

そしてキラキラと期待するような目でゴツ男（俺を殴った奴）を見ると、薄気味悪そうに視線を逸らされたが、ゴツ男は期待に違わず

詰所に連れて行こうと俺を引きずりあげる。

そんな俺の期待に反して、なぜか茶髪が俺を同居人ですと説明した。どうしようかと思っただけど、茶髪と仲良くなつとけば、黒髪シヨートたんとまた会えるかもと思って否定しなかった。結局すったもんだの拳解放された。

俺は茶髪のケガが心配だったが、碌に反撃せず防御に徹したのが幸いしたのか腕や足に青あざがある程度の軽傷で済んだらしい。住民が帰っていった後で心配する俺に今まで見たこともない顔で優しく笑って『大丈夫だから』と一言だけ言って、彼女は俺の手を取り歩き出す。

黒髪シヨートたんとその取り巻き達は俺が近づくだけで逃げたのに、俺の手をためらいなく握ってくれる茶髪は女神。マジ女神。さつき黒髪シヨートが本命って言うてごめんなさい。

でも、やっぱり俺の嫁は黒髪シヨートたんだ。

今でもこの手に思い出すのは今繋いでいる茶髪の柔らかな手ではなく、

シヨートたんの『たゆんたゆん』の豊かな双丘の手触りだ。

いつか君を迎えに行くよ。

そう思う俺は脳内で新しい力の芽生えを感じるのだった。

無能な三十路二一トだけど、恋をした(後書き)

スキル【不快様相】を手に入れました

俺のステータス

??? (状態・軽傷)

スキル

??? (脳内でなんか聞こえた。どうやらスキルがあるらしい)

持ち物

E シャツ&パンツ ∴ 体力 +1

E スニーカー ∴ 敏捷 +3

E チノパン ∴ 体力 +2

E 革ベルト ∴ 魅力 +1

謎コイン × 10

革ジャン ∴ 防御 +5

ジーンス ∴ 防御 +3

ボクサーパンツ ∴ 腕力 +1

バスケット&布

無能な三十路ニートだけどようやくチュートリアル来た(前書き)

前回のあらすじ

黒髪シヨートをもみもみで『たゆんたゆん』

茶髪は女神だった。

4日目の未明

無能な三十路ニートだけどようやくチュートリアル来た

「それで、この変なの連れ帰ってきたのかい？」

茶髪の女神が連れ帰った俺を見て、女は言った。

180は楽に超えていそうな長身と、腰まである長くうねった黒髪を無造作に垂らした姿は茶髪に負けず劣らず美しいが、この世界には珍しい黒いスラックスに白いワイシャツを着ているため、ファンタジーの世界の住人と言うよりはまるで勝気なハリウッド女優のような雰囲気だ。

「だってあのまま放っておけなかったから」

「アンタも他人に情け掛ける程の余裕ある訳じゃないだろうにねエ」「ちよつと置いとくだけならいいでしょ、ルネには迷惑かけないって約束する」

「まア、アンタがこいつの分まで食い扶持稼ぐならそれでもいいさ」

そう言っただけで彼女は俺の方を振り向き、ポンとタオルを渡し、『風呂湧いてるから入ってきな』と廊下にあるドアを示す。

俺は、言われた通りに浴室に入るとまだ痛む体を洗い始めた。

強烈なボディブローをくらった腹は、そのそばを洗うだけでまだズキズキする。それが嫌で先に顔を洗うと、固まった鼻血がパリパリと剥がれ落ちていった。

ここは東門のすぐそばにある結構立派な4階建ての建物の一室。先ほどリンチされていた茶髪の住処らしい。

「それで、アンタは多分、地球から来たんだろ」
風呂から出ると、俺と入れ替わりに茶髪が風呂に入っけいき（汚れ果ててた俺の後にも関わらずだ！まさに女神！）、俺はそのまま応接間に連れて行かれ、茶髪がルネと呼んだ大女に尋問を受けていた。座らされて即、地球と言う単語が出てきて驚いたが、大女の服装から見ても、どうやら地球の存在や文化を知っているようだ。

「はあ、多分そうです…」

「多分ッて、なんの説明も受けてないのかい？」

言われて、コクコク頷く俺。さっきから気分はヤクザの姐さんに従うチンピラ。

それを見て大女はハア〜とため息をつき、『なんかア運営がおかしくなってそうだとは思ったけど、ここまでとはねエ』と呟く。

運営ってことはやっぱりあのゲームが原因だったのか？

つづか、運営って俺や浅野じゃね？

そう思って、俺が地球でゲームの運営に参加していたことを大女に伝えたが、大女はそっちの運営じゃないとかぶりを振って説明し始めた。

アンタがやってたゲームって『神大陸周遊記』って名前だろ？
それ、実はアタシ等が作ったプログラムが入ってんのさ。
いやア、シンガポールの会社とかは関係なしに。

アタシ等がこっちで作ったプログラムさ。

厳密に言えばシンガポールの組織もアタシ等の仲間がトップだから、

関係あるツチャ関係あるけどね。

まアそれは置いといてだ。

プログラムの話だったかね？

そのプログラムなんだが、普段は動かないようにしてあるんだが…

…なんて言うのかね。トールの木馬？

ん、ああトロイかい、トロイの木馬って言うらしいね。アンタ等は。

そういう感じでこっちの世界から起動する事が出来んのさ。

特定の個人を選んでね。

で、その特定の個人の選び方なんだが…

説明する前に、アンタ、こっちの世界来てどう思った？

遠慮しなくていいから言うてごらんよ。怒りゃしないからさ。

危険？あはは確かに危険かもねエ。アンタ等には。

でも、もつと他にあるだろ？

ん、ああそう。いいこと言った。

技術が遅れて、まるで中世の時代みたいだと思っただろ。

町には単純な道具しかないし、機械なんてほとんど見ないだろ
うしね。

その割に、夜に街灯が灯ったりとちぐはぐしてるのに気づくと
は、

アンタ見た目より頭いいね。

こっちの技術が進んでたり遅れてたりして見えるってのは要するにね、

単純に技師が足りないのさ。

ここまで言えばわかるかね。

あのプログラムに組まれているのは、

ゲームをする人間の脳内の知識やスキルを調べる事と

それを固定データ化して精神ごとこっちに持つてくる事さ。

肝心のどんな人間が選ばれるかは、

あたしも下っ端だから、よく分かんないけどね。

少なくとも、地球側にはれない様に必要な人間を選んだ後は、

そいつとうまくコンタクトを取ってから

同意を得てこっちに連れてくるって約束の筈だったんだけどね

エ。

いろいろ理由があつてここの領主にシステムの使用権与えたら
どうも碌なことしていない様でさ。

「ろくな事をしていないって、どう言う事っすか？」

自分の身に関係あるような気がして、つい口をはさむ。

しかも何となくチンピラ口調で。

「いやア、大した事じゃないんだけどね。ここ以外の各地でどうも

地球から来た技師たちが売り出されてるって話なのさ」

まア、平たく言えば奴隷だよ。

そう言つて、目の前の大女は口角をあげるだけの社交的なだけの笑顔を作る。

奴隷

一瞬、俺がこの世界に初めて来た時に見た地下室の光景を思い出した。

あの薄暗いじめじめした部屋の中には浅野を含め数十人の人がいたが、彼らは今どうなっているんだろうか。

ん、なんだい？

奴隷になツたらどうなるのか知りたいのかい？

そうだねエ…それこそ千差万別さ。

アシャー ज्या 領内なんかだと科学技術が遅れてる事もあつてか知識ある人間はそれなりの待遇で迎えられているけど、

私の居たロチエルナの街じゃあ技師も溢れてて消耗品扱いだったしねエ。

まあ、そこ治めてる神サマが人間嫌いだしねエ。

神が居るのか。

しかも人間嫌いの神様が治める町があるとか、なんというかさすがファンタジーだな…

ひょっとして住民も獣人やモンスターばかりだったして。

ネコミミ獣人やリアルバーニールをモミモミ…じゃないモフモフできるんですね。股間、もとい胸がアツくなるな。

そう考えて、一人ニマニマしていると、大女はこちらを『大丈夫かなこいつ』という目で見ていたので慌てて真面目な顔を取り繕う。

そんで、なんの話だっけ？

奴隷が売り出されてる話？

ああ、そうそう。

各地で地球の出身らしき奴隷が売られているって言う話を聞いて、

うちの神様がアタシ等を調査に向かわせたのさ。

一応、地球の管理はうちの神様の領分だからねエ。

まあ、調査と言ってもシステム使っている何力所かの街に赴いて、

おかしな事してないか探るだけなんだけどね。

ちようどアタシが此処に来たのが1年ほど前で、

その時に見つけたのがアニヤーナ達さ。

大女はそういうと浴室の方を示すように軽く顔を向ける。

浴室では俺と入れ替わりに入って行った女神な茶髪が体を洗っているのかザブザブと水音がしている。どうやら、茶髪の名前はアニヤーナというらしい。

そのまま話を聞いてまとめた所によると、

この町に来たばかりの大女が、手始めに奴隷市に行くと一般人に紛れて売りに出される茶髪を発見。見た感じ何か感じるものがあったので、即金で購入して話を聞いてみた所、果たして彼女は地球の出身で、元はシンガポールの会社に勤務する一般人だったらしい。

ゲームのテスターとして配属されていたのだが、仕事中に強制的にこっちの世界に飛ばされて来たらしく、なんの説明もなしに城に召喚されたが、こちらで求められるスキルを持っておらず、しばらく城で『教育された』後に売り飛ばされたそうさ。

以来、自分達を大女から『買い戻す』ために働いているらしい。

「まあ、ここでの仕事が終わるまでに全額払えなかつたら、奴隷市

で売り飛ばすだけだからアタシはどっちでも構わないんだけどねエ」
そう言うと大女は『あんたは逃げてきたのかい?』と聞いてきたが、
『呼ばれてすぐ、いきなり城外に捨てられました』と状況を交えて
説明すると、大女は初めて楽しそうに笑った。

この様子からすると、やはり俺の扱いは異常だったらしい。
くそう…何でおれだけ…と思って頭を抱えていると、笑い転げてい
た大女が説明してくれる。

「おそらくは…分析スキル持ちのチェックで役立つスキルがなかっ
たんだろうね」

「…つまり俺が無能って事っすか?」

「そう言う事だよ」

無能だったら捨てずに帰してくれればよかったのに。

俺なんか呼んでもニートだし。職歴ないし。理系知識0だし。

そもそも何で召喚するんだよ。

ドラ エで言ったら即戦力にスライムとか仲間にする感じだぞ。

初めての召喚練習かよ。

コレ、ひよっとして浅野に巻き込まれただけじゃねえの?

あいつ商社勤務で技術なさそうだけど、東南アジアでプラント開発
とかしてたし。

というか、作った関係者いるなら帰してもらえるんじゃない?

「コレ、どうやって帰るんすか。」

ここ、ゲームの世界なんすよね と続けて聞く。

すると大女は目を丸くして口だけの笑顔を作ると、こちらを向いた

ままた黙ってしまった。

「ちょwww誤魔化さないでほしいっスwww」
沈黙に不安を感じ、女に発言を求める俺。

え、なにそれ。「冗談だよな。冗談って言ってよね。」

「えっと、まずここがゲームの中かって話だけど、ここは現実さ。」

「現実っスか？スキルとか言ってたっスよね？」

「まあ、それは後で説明するよ」

そう言っただけは言葉を区切ると、説明を続けた。

「もう一つ、帰るって言ったけど、

あのゲームに設定したプログラムの目的は技師を連れてくることだろう？だからこっちに連れてくるのはアンタ等の精神と知識、魂だけだねエ。肉体とか物理的なものはこっちで再構築してるわけさ。」

え…それって、つまり俺って地球では…

「多分、倒れて今頃は腐ってんじゃないのかね」
そう言っただけは女はアハハと面白そうに笑った。

無能な三十路ニートだけどようやくチュートリアル来た(後書き)

次回予告: 無能な三十路ニートだけどスキル買ったったWWW

俺のステータス

??? (状態・軽傷)

スキル

??? (多分無能らしいぜ...)

持ち物

Eスニーカー ... 敏捷 + 3

E革ジャン ... 防御 + 5

Eジーンズ ... 防御 + 3

Eボクサーパンツ ... 腕力 + 1

E革ベルト ... 魅力 + 1

謎コイン x 10

チノパン ... 体力 + 2

バスケット&布 ... アニヤーナに返しました

パンツ ... 三日履いていた汚れがひどくてアニヤが捨てました

シャツ ... 着てますが単品で補正効果出ませんでした

無能な三十路二トだけどスキル買ったったWWW(前書き)

前回のあらすじ

女神についてきたら悪魔みたいな大女が居た

あとなんか感想貰って、ガイアがビビった。

4日目

無能な三十路二一トだけどスキル買ったつたWWW

「アタシはルネヴェエラ・ハニヤ・ロチエルナ。呼び方はルネだろうが、ルハニヤだろうが何でもいいさ」

そう言えば、名前も尋ねていなかったなと思い、大女に尋ねたところ、どうでもいいとでも言う様にそっけなく言われた。

とりあえず、人に名前を聞く前に、こちらも自己紹介をと思い自分の名前を名乗ったのだが、ルネヴェエラ^{ねえ}姐さんは『明らかに地球出身だと知れると、いいカモにされるから名前は変えた方がいいねえ』と言って俺にオーマという名をくれた。

大宮から語感を取ってオーミヤという名前でもいいと思ったのだが、男だからオーマにしたらしい。姐さんには当然に逆らえる気がないので快く受諾する。

姐さんが名前をくれると言った時には、一瞬、中学時代に俺を苛めていたヤンキーカップルを思い出して、『キモミヤ』とか『かぶり黒子ポ』等の名前を覚悟したが、意外とネーミングセンスがまともだったので安心する。ちなみに最初のは中学1年のあだ名で、2番目は2年の修学旅行後のあだ名だ。

「姐さんのセンスが思ったよりマトモでよかったっす…」
思わず口にする俺。

「そうかい？」

「一瞬、禿げとかゴミみたいな意味を持つ名前にされるかと思ったっす」

「なんかア…アンタ、アタシを悪魔みたいに思っておいでじゃないかい？」

そう言っつて苦笑いするルネヴェラ。

最初の印象よりもずっと気さくな人なのかもしれないな。

初めて会ったばかりなのにこんな俺が気楽に話せてるのも珍しい。

「いや、悪魔っつ言うよりは…悪魔の奥さんと言っつか…」

「ん〜何となく言いたいこたア、わかるけどねエwww」

「ルネは魔人だよ」

声のした方を振り返ると、廊下からひよこんと顔を出した10歳に満たない程の赤毛の女児がトレーを手にテトテトと歩きながら部屋に入ってきた。

女児はそのままこちらに歩いてくると、姐さんと俺の前にトレーに乗せて持ってきたお茶を置き、自分の分のお茶を握りしめながら、俺の横にちょこんと座る。初めて会う俺にまったく物怖じしておらず、『初めまして、エリーです』とだけ挨拶するしぐさは見た目よりも大人びて見える。

「うるさくして、起こしちゃったかね」

「ううん、もう日が昇ってきてるよ。いつも通りの時間。」

そう言っつて、女児はトレーに乗っている堅そうな黒いパンをナイフで切り始めた。

そうこうしている内に、茶髪の女神が風呂から出てくると、女児を手伝い朝食のサラダを小皿に取り分けていく。

それから俺たちは談笑しながら食事を取り、女神が痛めた体を休めるために寝室に行くまでの間、俺は久しぶりの団欒を楽しんだ。

「そつえば、スキルってなんなんスカ？」

黒パンにサラダを挟んでグツチャグツチャ噛みしめながら俺が尋ねる。

「一言で言えば、人の脳にある技能をモジュール化して固定化したものだね」

残していった黒パンをアニヤーナの皿から取りつつ、ルネは興味なさそうに答えた。

たとえば、アンタが釘を打つ時を考えてごらんよ。

左手で釘を持って、右手でハンマーを持つ。

そして左手は釘が動かない様に、真っ直ぐ安定するようにしてから

右手のハンマーを外さない様に釘の頭にだけ当てるだろう？

コレ、子供が最初にやると意識してそれぞれの動作しなきゃいけないけど、

慣れてくると何ともなしにできるようになるじゃないか。

それは釘を抑えてそれを打つ動作が一連の動きとして

脳内でモデルが構築されるからなんだよ。

でだ、何十年か前にうちの神様が人間の脳の構造をデータ化してね。

そういう技能の情報を蓄積していくうちに、人の脳に拡張領域つけて

そこに技能を書き込んだりできる様になったのさ。

へえ、ふんふんと聞いている内に、いつの間にか俺のパンまで姐さんに食われてしまった。それでもまだ足りない様に、姐さんはエリーに『もう少し頂戴』と催促。エリーは黒パンとナイフを取り、黒パンを切り分けると、俺と姐さんに『どうぞ』と手渡す。

そのままナイフを仕舞おうとしたエリーだったが、ふと何か思い立ったようで、余っていたオレンジのような果物をトレーから取ると、滑らかな手つきで皮を剥き、薄皮を加工してあつという間に造花を作って、切り取った果肉を周りに添えた。

「スキルを貰えば、こつ言つ事もできるよ」

『にはっ』と可愛らしく笑って渡された花はテレビで見たホテルの料理人が作るような精巧なクオリティであり、間違つても幼児にできるものではない。

「すごいな……」

素直に驚嘆する俺を見て気分が良くなったのか、さらに余った皮で葉っぱを作り始める。

「ルネに料理のスキル、買ってもらつたんだ」

「何にもできないのは居てもらつても迷惑だからねエ」

嬉しそうに自慢するエリーと対照的に仏頂面のルネは呆れたようにしているが、そつけなさそうに言つても目は楽しそうにエリーを見ているあたり、ルネもエリーが可愛いのだろう。

俺がそう思っているのに薄々気づいたのか、

「エリーも地球出身でね、体を再構築する際にアンタ等は領域を作っているから改造処置もいらなかったしね」

と言いつつみたデレ方をしてそっぽを向く。

エリーはそんな姐さんを気にすることなく葉っぱを作り終わると、ちよつと照れた様子を見せながら俺に手渡してくる。どうやら褒めてほしいらしいので『ホント立派だわ』と声を掛け、葉っぱを受けとった。

「お兄ちゃんもスキル買えば、こういう事できるようになるよ」

「へえ、そうなのか」

「アニヤお姉ちゃんのお客さんの中には、地球人だったけどスキル買って魔獣をいっぱい狩ってる人もいるし。」

じゃあ、俺が剣術スキル買えば、明日から剣聖も夢じゃないのか。

並み居る強豪を努力0で撃破していくニート伝説の始まりだなww

「ただ、スキルがあっても能力が足りないとうまく使えないけど…」

能力か…まあ、頭で剣術覚えても体がついていかないと無意味って事か。

「それには、まずステータスとか調べないといけないねエ。エリーがやってくれる場所知ってるから、後で二人で行ってきな。」

はいよ。と声を出しつつ、俺と姐さんは争う様にエリーが作ったデ

ザートを食べた。

「はい、これで大丈夫です。それでは6番窓口でお呼びしますので、おかけになってお待ちください」

去り際に渡された番号札を持って、俺は部屋を後にすると、そのままロビーで待つエリーの元へと急ぎ足で歩いて行った。

ここは町の南西部にある大きな建物。

所謂、『ギルド』とかいう建物だ。

姐さんにやってこいと言われた、ステータスを調べるための手続きは書類の記入と脳の領域改造状態の確認だけなので、すぐに終わった。後は俺の情報を貰って帰るだけなので、ちよろいもんだ。

ロビーに戻ると、鎧姿に身を包んだ大男や、細やかなシルクっぽい生地の白いローブに身を包んだ女などの統一感のない面々が至る所にたむろしており、壁のポートに貼ってある白い張り紙を見ている者もいれば、受付の女性と話しながらまとめられたファイルペラペラめくり、云々と悩んでいる者もいる。

気になってエリーにあいつらが何しているか聞いてみたが、彼らの目的は単純で、冒険者への依頼や任務を探しに来ているらしい。

壁際に貼ってある張り紙が1週間以内の依頼で、窓口では依頼の請

負の他、公的任務や長期の依頼の斡旋をするんだとか。
暇潰しにボードの張り紙を見てみたが

『求む、市場テント設営 月 日〜3日間 未経験者歓迎 時給制』
『害虫駆除しませんか。即日払。害虫処分自由。5テル以上保
障』

『薬剤販売員募集。要スキル【薬学】5・【調剤】5』

等と言った、どこかで見たことあるような内容がびっしりと貼られていた。

エリー曰く、表向きは『ギルド』とかいう名前らしいが、俺これ知ってるよ。

引き籠ってた時、似たようなところにカーチャンに連れてかれたことある。

いわゆる職業安定所（ハークワーク）だ。

ファンタジーの世界に行ったら、そこは労働派遣の国でした…っと。
夢がねえなあ…

しかも、多分日本と違って社会保障もなさそうだし。

これは働いたら負けかもわからんね。

そう思っただけで見ている俺の横ではエリーがボードを隅から隅までをチエックしている。

「エリーの働ける仕事も相変わらずないのです…これでは何時まで経ってもアニヤお姉ちゃんにおんぶに抱っこです…」
としよげて長椅子に戻って行った。

流石に10歳に満たないエリーに誰も仕事をすることを期待してないと思うのだが、本人は何か思うところがあるらしい。

俺とエリーがボードを見飽きてから、30分ほどだろうか。

二人して長椅子で指相撲をして遊んでいると、俺の番号札がようやく呼ばれたので6番窓口に向かう。窓口では中世ヨーロッパ風の服装を着たオバちゃんが白色のブレスレットを持って俺を待っていた。

「お待たせいたしました。こちらがスキルブレスレットになります。登録料として3テル頂きます。」

テルって言うのは、こちらの世界のお金で、俺が持っていた謎コインがテルとか言うらしい。レストランで端金って言われた謎コインだが、ルネ姐さんに聞いたところ、有名な国の硬貨らしく、テルトルテ法とかいう事実上の国際通貨だとか。ちなみに1テル＝10ドルぐらいの価値って言うから、大体1000円か。レストランに入れんかったのは高級レストランはドレスコードとかいうのがあるのか、俺の格好が駄目だったかららしい。ちなみに1トルテ＝10000テルぐらいらしいので1トルテは百万なんだったよ。高額すぎて神サマ連中の専用通貨みたいな扱いなんだとか。まあ、一般人が使うのは人生に一回あるかないかららしいから俺には関係ないっポイ。

そんで、スキルブレスレットとかいうのが、脳の拡張領域にアクセスして俺のステータスとか確認する機械らしく、窓口のオバちゃんにはペチャクチャと勿体つけて説明しているが、見た感じ簡単そうなので聞き流す。

ポッケから謎コインを3つ支払い、さっそくブレスレットを嵌めてカチカチ弄ると、空中に大学ノート程の緑の情報ボードが『ブンツ』と出現した。

ナニナニ…

？状態確認？スキル詳細確認？環境設定： e t c
と色々あるが、よくわからん。

エリーに『どれ選べばいい？』って聞くと、エリーは自分のプレスレットを弄り、ボードを出現させると？を選択。ボードは薄い水色に代わり、空中に情報が表示された。

【登録者】 エリー 【年齢】 8

【基本職】 屍役術士 【サブ職業】 家事手伝い

腕力 11 (貧弱)

体力 15 (貧弱)

器用さ 40 (普通)

敏捷 18 (貧弱)

知力 37 (やや弱い)

精神 22 (弱い)

愛情 25 (弱い)

魅力 60 (やや高い)

生命 4 (不変)

運 ??? (算定のための経験が不足しています)

スキル

【食料料理】 L V ・ 1 2 【屍役術】 L V ・ 3 【交渉術】 L V ・ 7

おお、なんかファンタジーっぽいで。
エリー8歳かよ。完全に幼女じゃん。

屍役ってなんだろうって思って聞いてみると、死者を操る魔法で、もともとエリーに備わってたそう。何ができるか聞いてみたが、Y E S / N O の文字が書いてある紙の上にコイン載せて死者に質問できるんだってよ。

「それって…コックリさん？」

「…キューピッドさんです…断じてキューピッドなのです…」

どうやらあまり突っ込まれたくないようなので、気分を変えて俺の情報を見てみる事にする。喜び勇んでワクテカしながら？を選択すると、エリーのボードよりやや青がかったボードが『ブンッ』と出現。エリーも興味津々で覗き込む。

【登録者】オーマ 【年齢】30

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者（痴漢）

腕力 23（弱い）

体力 20（弱い）

器用さ 10（貧弱）

敏捷 10（貧弱）

知力 64（やや高い）

精神 8（虚弱）

愛情 30（やや弱い）

魅力 18（貧弱）

生命 9（不変）

運 ???（算定のための経験が不足しています）

スキル

【高等教育】Lv・26 【不快様相】Lv・1

「……………ひでえな……………」

「…お兄ちゃん、エリーとあんまり変わらない…」

俺の情報を見たエリーと俺。

あんまり期待はしてなかったが、ここまでひどいとは思わなかった。せめてスキルが使えるスキルならと一縷の望みをかけて？スキル詳細確認を選択してみる。

【高等教育】

物事を理論立てる事で理解力を高める事が出来ます。同じ高等教育のスキルを持つ仲間との意思疎通が円滑化できます。

【不快様相】

性犯罪を犯すことで手に入れられます。女性を遠ざける事が出来ません。
性犯罪系サブ職業に就くための必須スキルです。

「両方とも死にスキルじゃねえか…」

「…お兄ちゃん…エリーよりどうしようもないね…」

やや高いとなつている知力があつても、ボードの求人情報見る限り、専門スキルがないと無意味っぽい。唯一期待できるのは？？となつてる運だけが、運が良かったらまず『異世界に呼び出されて捨てられる』ことはなさそうなので、こっちもダメっぽい。

「じゃあ、当初の予定通りスキル買うか…」

「安くていいのがあるといいね。」

そう呟いて俺たちは隣のスキル屋に向かうことにした。

「【剣道・黒帯】 80テルか…8万で黒帯…高いのか安いのか」
「柔道の黒帯は140テルだよ」
「【理系・鉄鋼】が15トルテ（1500万）だったり、値段のつけ方がいまいちわからんな…」

俺たちはスキル屋に来ると、カウンターに並んで腰掛け、揃ってパラパラと備え付けのカタログをめくり、よさそうなスキルをそれぞれ探し始めた。周りでは俺達と同じ白いブレスレットを嵌めた奴らが『魔獣対策に剣術スキルと回避を極めるべき』とか『費用対効果で言えば、高くて理系知識を得て技師として働く方が…』、『レベルが低いと理系も死にスキルだから…Lv上がりにくいし』などありだこーだと議論を繰り返している。

聞き耳を立てながら、俺に使えそうなスキルを探すが、資金が圧倒的に足りねえ。
持つてるのは7テルで、装備を整えること考えると3テルは残してえ。

よって、4テル（4000円）が俺のスキル予算だが。

【二刀流剣術】 200テル

【細剣】 100テル

【アーチェリー】 160テル

【石工】 500テル

【東洋家具職人】 1トルテ

ってどう考えても買えねえし。

おっこれよくね。【砂金採り】 3テル。金山と川が近くにないと駄

目そうだけど。

2テルで【鈍器術】ってあるけど、鈍器って言葉で【棍棒術】とか【槌術】じゃないのが気になるな…サスペンスドラマで鈍器って言うとか花瓶とか灰皿が凶器だしよ。

【料理】300テルねえ、ん？

ちよwww

エリーの持つてる【美食料理】、2トルテんだけどwww

『何にもできないのは居てもらっても迷惑だから』で2百万払うとかwww

ルネ姐さんが可愛くなってきたな。

あー俺にもなんか買ってくれねえかな。甘えてもおっさんだから無理か。

「エリーは何欲しいんだ？」

飽きてきたので、さっきからカタログのページを食い入るように見つめているエリーに声を掛ける。

「可愛い魔法」

此方を見ることなく答えるエリーのカatalogを覗くと、【火魔法】や【木遁】といったスキルがズラーと並んでいる。

魔法なんてあるのかよというところ、エリー曰くこちらの世界の住民は精神エネルギーを使って魔法を使えるんだとか。そういえば、昨日見た冒険者っぽい集団の中にガラス球のついた杖持った魔道士みたいの居たわ。

「屍役術ってあんまり可愛くねえもんな」

「杖を使う魔法が欲しいです」

エリーが見つめるカatalogの挿絵には、いかにも魔法少女と言った

風情の可愛らしい少女がステッキから雷を出す姿が描かれている。よく考えれば、エリーはまだそういうアニメを見ていても可笑しくない位の年だ。それがファンタジーの世界に来て持つている魔法がコックリさんだったらシヨックだわな。俺だつて嫌になると思う。

安い魔法でも買ってやるうかと思つたが、一番安い日常生活用の【火魔法】でも100テル。戦闘用だとトルテ級がほとんどだ…

それでもペラペラとカタログを捲っていくと、安い魔法のページを発見。

【服のシミを取る魔法】、【本の折れたページをきれいにする魔法】など実用的な魔法が1〜10テルほどの値段でバーゲンセール状態。

「ここの2テルぐらいの奴なら買ってもいいぞ」

というと、エリーは嬉しそうに使えそうな魔法を探し始めた。

結局、俺はさつき見つけた【鈍器術】を買うことにした。

理由は他のスキルは全部生活上のスキルで、戦闘になつた時に使うスキルはこれしかなかつたからである。それに鈍器術なら花瓶とか灰皿を武器に動けるかもしれん。もし家に変質者が来て可愛いエリーを襲おうとしたら花瓶が武器になる。これは大きい。と思いたい。

ちなみにエリーはいろいろ迷つた挙句、【日光乾燥】という魔法を買つた。

これは元々は10テルのスキルで洗濯物に日光が当たつてる場合、その乾燥をちよびつと早める魔法らしい。エリーが杖が使える魔法

を欲しがっている事を知った受付の兄ちゃんがその可愛らしい姿に心を動かされて、内緒でサービスして5テルにしてくれたので、俺の持ち金を全部使って買ってやった。一応、杖を使って使える魔法らしくエリーは喜んでた。

「お兄ちゃんありがとう」

喜ぶエリーの顔を見て、俺に娘が居たらエリーぐらいの年かと思いつつ、俺はルネ姐さんの気分が分かった気がした。

無能な三十路ニートだけどスキル買ったったWWW(後書き)

家に変質者来たらって、言ってる本人のサブ職が…

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者(痴漢)

腕力 23(弱い)

・単純な筋力を表します。

体力 20(弱い)

・肉体の強度と状態異常への耐性を表します。

器用さ 10(貧弱)

・スキルの精度や製造業への親和性を表します。

敏捷 10(貧弱)

・単純な体の動きの速さを表します。

知力 64(やや高い)

・物事への理解力を表します。

精神 8(虚弱)

・心のゆるぎなさで魔力を表します。

愛情 30(やや弱い)

・物事への執着心を表します。

魅力 18(貧弱)

・身体的、精神的な魅力を表します。

生命 9(不変)

・生まれ持った生命エネルギーを表します。

運 ???(算定のための経験が不足しています)

・生まれ持った運です。

スキル

【高等教育】 L V ・ 2 6

【不快様相】 L V ・ 1

【鈍器術】 L V ・ 1

・鈍器の扱いが上手くなります。 これしか詳細説明なかった

持ち物

Eスニーカー …… 敏捷 + 3

E革ジャン …… 防御 + 5 (防御ってなんだろ?)

Eジーンズ …… 防御 + 3

Eボクサーパンツ …… 腕力 + 1

E革ベルト …… 魅力 + 1

チノパン …… 体力 + 2

ちょっとカニ殺しに行ってくるわ(前書き)

ニートは毎日が日曜日。

ちょっとカニ殺しに行ってくるわ

「ちょっとカニとってくるわ」

そう言って朝から家を出ようとした俺を麗しき女性陣はアホを見る目で見つめた。

「カニってタンバの事？あなたじゃあ無理だと思っただけど…」
「お兄ちゃん、頭おかしくなっちゃったの？」

明らかに心配顔なアニヤーナ。

キチ イを見る目で俺を見るエリー。

そんな二人とは対照的にいつも通り姐さんはどうでもよさげな態度。

「ほっときな。家でゴロゴロしてるよりはいいじゃないか」

俺を見るのをやめ、テーブルで新聞を読み続けている。

「だめよルネ！タンバなんて普通の男性でも大怪我するのに！」

「どうせ怪我するほどタンバに近寄れやしないさ」

「ビビりだもんね。お兄ちゃんは。」

そう言っつて、三人とも明らかに俺の事を軽く見てやがる。

まあ、それもこれも俺のステータスの低さと、ここ1週間近くの間
の俺の行動が原因なのだが…

俺がギルドで登録をした日から今日で10日目。

あの日から俺は、昼は城門前で浅野が出てくるのを待ち、夜は女神の送り迎えをすることになった。送り迎えでは、娼婦たちが女神に敵意のこもったまなざしを送るのは感じたものの、その後ろでむつつり座り込んでいた俺を見て彼女らは女神を無視。手を出してこようとはしなかった。そんな中、流石の売れっ子女神は、俺が後ろに居ても相変わらずの即売れ。俺はすぐ暇になり、女神の帰りまで夜の街を歩き回っていた。そして城門西側大通りの街灯の下で、黒髪ショートたんを発見。まさに運命の出会いだった。

俺は黒髪ショートたんを見つけると無言で近寄り、話しかけようとした。しかしいざ後ろに近寄るとかける言葉が浮かばない。「あ・う・う・う・」と呟いている内にショートたんはこちらに気づき、逃げていってしまう……。

次の日も、また次の日も似たようなことをやっていたんだが、4日目に俺と女神が連れ立って歩いていると、ショートたんとその取り巻きがやってきて、遠巻きに女神に話があるからと言ってきた。しばらく俺から離れ、2人で話をしていたが、最初からなぜか和気あいあいとした雰囲気、まるで女友達同士のように楽しそうな感じ。どうやら仲直りしたらしい。

それはめでたい。

じゃあ俺も黒髪ショートたんとお友達から始めたいお。と近づこうとしたところ、女神は急いでこちらに來ると、『おねがい…帰って』と申し訳なさそうに言った。

……どうやらショートたんは女神に客を喰われる事より俺が近くに居る方がよっぽど嫌だったんだな…

ポッチには慣れてるが、それでも拒絶されるとやはり辛いものだ。

一人寂しく家に帰るうちに、なんだか城門の外で浅野を待っていても、浅野が俺を見た瞬間に嫌がられそうな気がして、その日から浅野を待つのもやめてしまった。

以来、エリーの買い物物の荷物持ちに行く以外には、家でグータラと寝て過ごしている。

ルネ姐さんには鬱陶しそうにされるが、エリーには遊び相手が出来て喜ばれているのが救いか。

そんなエリーは俺の買ってやった魔法がとても気に入ったらしく、掃除道具にあつたはたきをステツキ代わりに【日光乾燥】を洗濯物にかけては喜んでいる。ちよびつと乾くのが早くなると言われた日光乾燥だが、連続で重ねがけしていれば効果も増すらしく、一生懸命魔法をかけ続けるエリーは、10日目で30分もあれば洗濯物が全部乾くようになってしまった。レベルも上がって一気に10になつてた上、精神も5ポイント上がって27になつたらしい。ルネ姐さんに聞いたが、人の魔法は才能と精神がモノを言うらしく、エリーはそういうのに恵まれてるそうなの。

エリー本人も魔法使いになりたいらしく、家事の合間に俺と遊ぶ時には、魔法使いごっこをよくやりたがる。設定は俺が家に埃を撒き散らす悪の怪人で、エリーが正義の変身魔法少女。埃を撒き散らしながら逃げ惑う俺をはたきで叩き、最後に日光魔法で俺を乾燥させてとどめを刺して終わる。

それでびっくりしたんだが、【日光乾燥】って人にも効くんだな。

一昨日は遊びがエキサイトして5分ほどかけられたんだが、唇がパ

リパリになつたうえ、顔面が土気色になつてたらしい。たまたま2階から降りてきたルネ姐さんが俺を見て驚愕。俺は慌てて担ぎ上げられ、風呂場の浴槽に叩き込まれた挙句、塩をとかした水をしこたま飲まされた。

俺は楽しんで『ギャーww』とか『死ぬよううwwww』とか言つてたけど、実際に脱水症状を起こしてたらしい。

結局、姐さんに遊びでの魔法の使用を禁止されて、エリーはすげえ落ち込んだ。

なんか安全な魔法を買ってやりたいが、俺もお金がない。

ギルド（ハロワ）でバイトでも探せばいいのだが、働きたくないでござるし。

そんな中、昨日行つた市場で俺は驚くべきものを発見した。

それは俺にこの世界の危険性を真つ先に教えてくれた恩師。

そう巨大な体に、犬の頭ほどの4つの缺と何十本という足を持つあの『カニもどき』先生との再会である。

久しぶりに会つたカニもどき先生。この前に見たときはやや緑がかつた体だったが、市場の先生は熱湯で真つ赤に茹つていた上に、その御身を3つに裂かれていた。売り子のオバちゃんに聞いてみた所、タンバとかいう魔物で、高級食材らしい。値段は1/3だけで10テル（1万）もした。

先生はカニの癖に足がすげえ多いので、見た目がゲジゲジみたいでグロイ。

だから食えるのか疑問だったが、キラキラした瞳で見つめるエリーが物欲しそうな顔をしているのに気付いたのか、オバちゃんが少し

だけ試食させてくれる事に。

大量にある足の内、小さい一本を『ぶちり』とちぎって塩を掛けた物を食ってみる。

その感想。

ほくほくと湯気を上げる先生は
プリンプリンの触感でむっちゃ美味かった。

エリーもがつつく先生のジューシーな美味しさ。
あのルネ姐さんも好物らしく、ごく稀に一人で出かけていって、どこからか先生を持ってくるのがエリーの楽しみなんだとか。

「もっと食べたいのです……」
そう言うエリーだが、ルネ姐さんは気分屋なのでいつ持ってくるかわからないらしく、それに一応エリーと女神は奴隷なのでおねだりもしにくいんだと。

買おうにも俺らはそんな金ねえし。
…だったらコレ取ってこればよくね？

と言う事で、冒頭に戻って

「ちょっとカニとってくるわ」
の俺の発言が飛び出したのである。

「無理して怪我をしないようにしてね」

「中途半端に怪我する位なら死んでくるんだよ。手当がめんどうだからねエ」

「お兄ちゃん、もし死んだらエリーがお兄ちゃんの霊を毎日呼んであげるね」

俺がどうしても力ニを取ってくるつもりと知った女性陣は、三者三様に心配してくれた。

特にアニヤーナはなぜか俺の事を子ども扱いし、『絶対に行かない方がいい』、『無理しなくても、あたしが食べられる分は稼ぐから…』などと最後まで渋っていたが、『試しにやってみるだけで大丈夫だから』と言いつける俺に最後は折れる形で送り出してくれた。

そうして道を行く俺の心はウキウキ。

自然と足取りも軽く、顔もニヤニヤ笑っている。

一匹20テル(2万)以上の高級食材？

あそこ(橋の下)には大量にいたおwww

女神たちには悪いけど、これで大金持ちだおwww

ブヒユフユヒユwwwwww笑いが止まらんおwww

汚い俺の考えが顔にも出てたのだろう。

通り過ぎる人々に気味悪がられながら、俺は家のそばの東門を通り、川に向かって街道をテックテックと歩いて行った。

ちょっとカニ殺しに行ってくるわ(後書き)

俺のステータス

【基本職】ニート 【サブ職業】変質者(痴漢)

腕力 23 (弱い)

体力 20 (弱い)

器用さ 10 (貧弱)

敏捷 10 (貧弱)

知力 64 (やや高い)

精神 8 (虚弱)

愛情 30 (やや弱い)

魅力 18 (貧弱)

生命 9 (不変)

運 ??? (算定のための経験が不足しています)

スキル

【高等教育】 LV・26

【不快様相】 LV・1

【鈍器術】 LV・1

持ち物

Eスニーカー …… 敏捷 +3

E革ジャン …… 防御 +5

Eチノパン …… 体力 +2

Eボクサーパンツ …… 腕力 +1

E革ベルト …… 魅力 +1

ジーンズ

∴ 防御 + 3

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4453x/>

無能な三十路二一トだけど異世界来た

2011年10月26日12時09分発行